

戦後横浜の戦争孤児を保護した民間児童養護施設

西村 健

● はじめに

1945（昭和20）年5月29日の横浜大空襲をはじめ、数度の空襲で焼け跡となった横浜市内には戦後、多数の戦争孤児が存在し、浮浪児となって路上生活を送る者が街に溢れていた。1949（昭和24）年に高野まさ志が記した『市従文化』のルポルタージュ記事には当時の様子が以下のように記されている。

原子力戦争の惨禍の中から立ち上つた大よこはまの表玄関、桜木町駅一構内、構外、街角にみなそれぞれに理由があるのであろうが浮浪して歩く児童のいかに多いとか。子を、弟を持つ社会人としてひとり心を痛めぬものがあるのか。よこはまの「浮浪児」は、いまやある意味で世界の話題になっている。敗戦日本の姿がこれほど^{ママ}卒直にむき出しになっているところはないからである¹。

この記事では、桜木町駅周辺に多くの浮浪児が集まっていたことを取り上げ、闇市が広がっていた野毛で、孤児達が「カチアゲ」（恐喝）や「ボンビキ」（売春）などに手を染めながら生活している様子が記されている。

戦争孤児とは、本分野の研究における先駆者である逸見勝亮氏によれば「空襲などにより両親を失った戦災孤児と日本の植民地・占領地において孤児となったものあるいは引揚げの途上で孤児となったものの総称」²である。空襲や戦後の混乱などの戦争被害によって、本来彼等を保護すべき家庭を無くした孤児達は、多くが親類縁者に引き取られた³が、引取先の無い孤児や、引取先で虐待などを受けて家を逃げ出す孤児も多く存在し、大都市に逃れて路上生活を送ることを強いられた。

このような孤児達の保護に対し、大きな役割を果たしたのが、民間の保護施設である。厚生省が1948（昭和23）年に実施した「全国孤児一斉調査」⁴では、沖縄を除く全国に、数え年20歳以下の孤児が123,511人存在し、このうち12,202人（戦災孤児4,055人、引揚孤児1,140人、一般孤児5,506人、棄迷児1,501人）もの孤児達が施設に保護されたことが記されている。また、山口春子氏⁵の研究では、現在の児童養護施設の約3分の1が1945（昭和20）年～1950（昭和25）年の戦後混乱期に設立されており、戦争孤児や浮浪児の保護のために建てられた多くの施設が民間の経営であったことが明らかになっており、公的な施設と共に、民間の施設が戦争孤児の保護に果たした役割は顕著なもので

1 高野まさ志「地方のひとに読んで戴きたい よこはま『浮浪児』点描」『市従文化』（第16号、1949年4月。山本武利監修、永井良和編『占領期生活世相誌資料Ⅰ』（新曜社、2014年）所収資料）。

2 逸見勝亮「第二次世界大戦後の日本における浮浪児・戦災孤児の歴史」『日本の教育史学』（教育史学会紀要、第37号、1994年10月）113頁。

3 厚生省の「全国孤児一斉調査」（註4）では、1948年の段階で存在した12,351人の孤児のうち、約9割に相当する107,108人が祖父母、兄弟、親戚、知人などに保護され、4,201人が自活していることが記されている。

4 寺脇隆夫編、解説『資料集 戦後日本の社会福祉制度Ⅷ 母子・児童・老人福祉基本資料』（第3巻、児童福祉（1）、児童福祉一般（1）、柏書房、2016年）所収資料による。本調査では、養子となった孤児たちは戦争孤児の数に含まれていない事、浮浪児が含まれていない事などから、更に多くの戦争孤児達が存在していた可能性を多くの先行研究が指摘している。

5 山口春子「戦後混乱期の養護施設」『人文学報』（通号179号、1985年3月）。

あったことが把握できる。

地域における戦争孤児の保護に関する研究は、従来、自治体史や教育委員会が編纂する教育史などでその概要のみが紹介されることが多かったが、戦後60年を迎えた1990年代半ばから、逸見勝亮氏⁶、前田一男氏⁷、北河賢三氏⁸などの研究者や、自らも戦争孤児である金田茉莉氏⁹によって調査が進められ、戦争孤児保護の法的整備過程や孤児・浮浪児の実数など、東京都の戦争孤児を中心とした資料や事例が分析された結果、その実態が明らかになりつつある。施設に保護された孤児達の研究については、児童養護施設での勤務経験を持つ藤井常文氏¹⁰によって、「特質浮浪児」の隔離を目的とした東京都台場の「東水園」と八丈島の「武蔵寮」についての詳細な研究が、昨年発表されているほか、茨城県と長崎県における戦後の児童養護施設について論じた近江宣彦氏¹¹による研究がある。また、赤塚康雄氏¹²が大阪府における戦争孤児保護施設「大阪市郊外学園」の研究を発表したほか、京都府における戦争孤児の保護施設を、施設の卒園生に対する聞き取り調査も含めて複数調査・研究した成果を本庄豊氏¹³がまとめており、従来、東京都の戦争孤児が中心であった研究に大きな進展をもたらしている。こ

のうち、本庄氏は戦争孤児研究のポイントの一つとして、「戦争孤児施設は現在、児童養護施設として運営されている。とすれば、こうした施設に眠っている史料や、施設関係者の証言を集めれば、戦争孤児の真の姿を浮かび上がらせることができるのではないか」¹⁴と指摘している。この問題意識は小稿の課題と同一であり、親類縁者等の家庭内で保護された戦争孤児の調査・研究と並行して、保護施設において保護された孤児の実態を、施設が所蔵する資料や記念誌、および関係者の聞き取り調査を通じて解明する研究の必要性を認識している。筆者は本紀要の前号¹⁵で、戦後横浜における引揚者、戦災者、戦争孤児・浮浪児、「混血孤児」などの人々に対する民間社会福祉事業団体の保護活動について、その概要を紹介したが、その後、横浜都市発展記念館の企画展「焼け跡に手を差しのべてー戦後復興と救済の軌跡ー」（会期：2016〔平成28〕年10月22日～2017〔平成29〕年1月15日）開催のために実施した調査において、前号では紹介できなかった、横浜の戦争孤児と引揚孤児の保護施設に関する新たな知見や資料を発掘することができたため、小稿ではその成果について紹介していきたい。

6 逸見前掲論文（註2）のほか、「敗戦直後の日本における浮浪児・戦争孤児の歴史」『北海道大学大学院教育学研究院紀要』（第103号、2007年）。

7 前田一男「焼け跡の子どもたち 解説」戦争孤児を記録する会編『焼け跡の子どもたち』（クリエイティブ21、1997年）。

8 北河賢三「戦後日本の戦争孤児と浮浪児」『民衆史研究』（第71号、2006年5月）。

9 金田茉莉『東京大空襲と戦争孤児ー隠蔽された真実を追ってー』（影書房、2002年）。

10 藤井常文『戦争孤児と戦後児童保護の歴史ー台場、八丈島に「島流し」にされた子どもたちー』（明石書店、2016年）。

11 近江宣彦 a「茨城県における戦後期の養護施設をめぐる動向に関する試論」『コミュニティ振興研究』（常磐大学コミュニティ振興学部紀要、第20号、2015年3月）。b「長崎県の戦後期児童福祉施設における要援護の状況と『ララ救援物資』の配分に関する考察」（常磐大学コミュニティ振興学部紀要、第21号、2015年11月）。

12 赤塚康雄 a「第二次世界大戦後大阪における戦争孤児の生活と教育（上）ー大阪市立郊外学園を中心にー」『大阪民衆史研究』（第67号、2012年12月）。b「第二次世界大戦後大阪における戦争孤児の生活と教育（下）ー大阪市立郊外学園を中心にー」『大阪民衆史研究』（第68号、2013年12月）。

13 本庄豊 a『戦争孤児ー「駅の子」たちの思いー』（新日本出版社、2016年）。b『「駅の子」（戦争孤児）たちの戦争と戦後』『前衛』（第938号、2016年9月）など。

14 同前本庄論文 a 168頁。

15 拙稿「戦後横浜の社会福祉事業ー引揚者、浮浪児・戦争孤児・「混血孤児」の保護を中心としてー」『横浜都市発展記念館紀要』（No.12、2016年3月）。

第1章

戦後横浜の

戦争孤児の保護を担った施設

(1) 横浜における戦争孤児保護の概要

戦争孤児の保護は、戦後の厚生省における重要な問題であり、1945年（昭和20）9月には「戦災孤児等保護対策要綱」が決定され、孤児の個人家庭での保護委託、養子縁組、施設への収容などが定められたが、実効性に乏しく、翌年9月に定められた「主要地方浮浪児等保護要綱」によって東京、神奈川、愛知、京都、大阪、兵庫、福岡に児童収容保護施設が設けられることになった。1947年（昭和22）には同省内に児童局が設置され、「児童福祉法」が制定されると、全国に児童相談所の設置が義務づけられ、児童の状態によって養護施設、精神薄弱児施設、教護院等に入所させる措置がとられた¹⁶。

同省の「全国孤児一斉調査」の記録によれば、神奈川県には1948（昭和23）年の段階で2,486人（戦災孤児553人、引揚孤児275人、一般孤児1,438人、棄迷児220人）の孤児が存在し、1,831人が親戚などの家に保護されるか自活しており、655人が施設で保護を受けていたことが記されている。本調査では、調査日の当日に「浮浪児の絶無を期して」浮浪児の収容保護を一斉に行うこととされていたが、浮浪児がすべて保護されたとは考えられないので、その実数についてはこの記録からは把握できない。浮浪児については、1948（昭和23）年4月に開催された第一回中央児童福祉委員会（児童福祉法第8条による調査審議機関）で配布された資料¹⁷によれば、浮浪児については、1946（昭和21）年度に355人、翌47年度に471人の浮浪児が

保護された事が記録されているほか、神奈川県民生部が1953（昭和28）年に発行した『神奈川の社会事業』¹⁸では、浮浪児と思われる「巷にいたる戦争孤児」の推定数として、1946（昭和21）年に500名、47（昭和22）年に470人、48（昭和23）年に430人、49（昭和24）年に335人存在したとする数値が示されており、数百名を超える孤児達が数年にわたり浮浪児として生活することを余儀なくされていたことがわかる。

神奈川県¹⁹では1945（昭和20）年11月に横浜駅、桜木町駅、浦舟町などに天幕収容所を建てて孤児達を保護したほか、1946（昭和21）年3月に浮浪児保護収容を行い、神奈川県匡済会の新興倶楽部に一時収容したのを皮切りに、当時「狩り込み」と呼ばれた浮浪児の保護を本格的に開始する。また、同年9月には「主要地方浮浪児等保護要綱」の制定により、瀬戸ヶ谷町の遊郭であった家屋を買収して児童保護所を創立。翌年横浜駅東口に第一保護所を増設し、瀬戸ヶ谷町の施設は第二保護所として施設入所を必要とする児童のみを収容する。この後、1948（昭和23）年の「児童福祉法」施行により第一保護所を神奈川県中央児童相談所とし、第二保護所を翌年廃止する。また、神奈川県では中里学園、横浜市では富岡学園を設置したほか、民営であった三春園を市営とし、孤児達の保護を行ったが、公的な施設のみでは手に負える数ではなく、多数の民間団体・個人によって保護施設が設立されることになった。

神奈川県における戦争孤児・浮浪児の一時保護において、主要な役割を果たした神奈川県中央児童相談所が1951（昭和26）年に発行した『神奈川県中央児童相談所誌』（以下『所誌』と略記する）には、児童福祉法が施行された1948

16 厚生省による戦争孤児保護の歴史については、先行研究のほか、厚生省五十年史編集委員会編『厚生省五十年史（記述編）』（中央法規出版、1988年）による。

17 「浮浪児、不良児関係資料」、前掲書（註4）所収資料。

18 神奈川県民生部編・発行『神奈川の社会事業』（1953年）。

19 神奈川県の活動については、松本久雅之介「児童相談所のなりたち」（横浜市中央児童相談所編・発行『横浜市児童相談所50周年記念誌』2010年所収）の記述による。

(昭和 23) 年には、同所に保護された児童のうち、浮浪児が全体の 59.2% を占め、保護者の疾病や離婚などによる養育不能が原因で保護された児童を大きく上回っていたが、翌年度には浮浪児が 28.1%、養育不能が 40.1% と徐々に少なくなっていることが記されている。1950 (昭和 25) 年度の浮浪児は、家出による者が多かったが、この理由について同書では「殊にこの家出は戦争により孤児、若くは片親になつたもので、その後親戚その他の家庭内に保護されていたものが、終戦五年の年月の間にお互に面白くないことがおこり、遂に家出に至つた者が多いことは、注目に価する」と記しており、引取先が安住の地ではなかった孤児達が浮浪児となることを余儀なくされたケースが、戦後数年を経ても継続して存在していたことが把握できる²⁰。

戦後横浜の街に多くの戦争孤児達が集まった要因は何であったのか。この点について、全国的な例から考えられるのが、学童疎開で地方に疎開した学童が、空襲によって都市に残った家族を失い、適切な保護が為されなかったために行き場を失って街で路上生活を送るケースである²¹。このケースに対して、1946 (昭和 21) 年 1 月 17 日付『神奈川新聞』では以下のように報じている。

疎開児から浮浪児へ

街の浮浪者救護のため県で種々調査を進めたところ桜木町駅前天幕に収容されている二人の少年が終戦まで疎开学童であったことが判明した。この少年は東京都浅草区千束町に本籍を持つ某さん (一四) と弟 (一一) の兄弟で宮城県の川渡温泉に集団疎開していたが終戦後帰京してみると親

兄弟も親戚知己も全然不明で遂に浮浪者仲間に入り残飯もらひで暮らしているのである。

この問題は当然東京の責に^{ママ}んで終戦の混乱にまぎれて戦災孤児の救済をおこたつたのであるが本県では一体戦災孤児にはどう云ふ措置がとられたかと云ふと県では七十二名の孤児が居^{ママ}か疎開が県内で行はれた為その救済措置も急速に行はれそのうち大部分が最も近い親戚に引き取られて現在すぐ引取り手のない者三名が小田原在の或る寺院に収容されて居り、この三名も近く適当な人に引取られて行くことになっている。〔後略〕

ここでは、東京の空襲によって家族を亡くした孤児が、横浜で保護されていた事に加え、神奈川県下の疎開児童には、空襲によって 72 名の孤児が生じたが、その多くが親戚に引き取られ、身寄りのないものは小田原の寺院に保護されたことが記されている。横浜市では文部省の指令によって各疎開地から小田原市の玉宝寺に孤児を集め、集団合宿教育所を設置して敗戦当時 36 名の孤児を保護しており、このうち引き取り手のない孤児たちが、のちに横浜市営の富岡学園に移される事になる²²。本記事の真偽はより正確な資料と比較の上、検討する必要があるが、当時、横浜に存在した孤児達の多くが横浜市民ではなく、他の都市から流入してきたことが推測できる。『所誌』には「何といても神奈川県には米軍の駐屯多く、東海道線沿線でもある為、全国から浮浪児が集つた」と記されており、米軍の駐留が孤児達を多く集めた要因として記述されている。日本の占領と軍政を担

20 厚生省の「全国孤児一斉調査」では、親戚などに預けられて養子となった児童は戦災孤児としては捉えられておらず、全国の児童相談所職員もこの認識を共通して持っていたことが推測できるが、彼等のうち、少なくとも人数の児童が虐待などを受け、家を逃げ出したケースが現在の研究によって多く確認されている。小稿ではこれらの家出児童も戦災孤児として扱う。

21 先行研究のほか、石井光太『浮浪児 1945 - 戦争が生んだ子供たち -』(新潮社、2014 年)に事例が紹介されている。

22 横浜市総務局市史編集室編『横浜市史Ⅱ 第二巻(下)』(横浜市、2000 年) 628 頁。

う米第8軍の司令部が置かれ、数万もの占領軍兵士が駐留した横浜では、兵舎から出る残飯が豊富にあり、これを目当てに各地から孤児達が横浜の市街に集まったことが推測できる。当初、孤児達は駅前・天幕などに保護されていたが、『所誌』に所収された当時の関係者による座談会では「テントを張って浮浪者を保護したんだが、テントの管理はあの顔役がやっていたんだ。顔役は浮浪児から靴みがきの場銭をとったりして稼いでいた訳なんだ」、「浮浪者と浮浪児が利害関係で結びついてたんだ。浮浪児が残飯もらいやかつばらいの手先だつたり、パンパンのメッセンジャーだつたりして、本町通りや野毛に巣をくついていたんだ」など、孤児達が

荒んだ生活を送り、大人達に搾取されていたことが回想されている。このような事態に対し、恒久的な保護を与えるために立ち上がったのが、民間の社会事業家たちである。【表1】は『所誌』に掲載されている、1951（昭和26）年時の神奈川県下における児童養護施設の一覧であるが、県下には公立の3施設のほか、24の民間施設が存在していた事が把握できる。その多くが戦争孤児を保護するために戦後に設立された施設であり、横浜の市街地で路上生活を送る孤児達の多くがこのような施設に保護された。これらの施設は、大多数が現在でも活動を継続しており、戦争孤児の保護が現在に至る児童福祉の原点となっていることがわかる。この民間

【表1】神奈川県児童養護施設一覧（昭和26〔1951〕年2月現在）

名称	経営主体	所在地	定員	収容実人数	設立年
県立中里学園	神奈川県	横浜市港北区上谷本町	50	47	1946（昭和21）年
富岡学園	横浜市	横浜市金沢区富岡町	60	57	1947（昭和22）年
横浜三春園	横浜市	横浜市南区三春台	40	48	1898（明治31）年
ボーイズホーム	(財)日本厚生団	横浜市中区日之出町	33	37	1946（昭和21）年
高風子供園	(財)白峰会	横浜市中区本牧元町	60	29	1946（昭和21）年
聖母愛児園	(財)大和奉仕会	横浜市中区山手町	—	—	1946（昭和21）年
日本水上学堂	日本水上学堂	横浜市中区山手町	60	101	1942（昭和17）年
横浜家庭学園	(財)幼年保護会	横浜市保土ヶ谷区釜台町	5	4	1906（明治39）年
仲愛園	個人（代表：内田音松）	横浜市保土ヶ谷区月見台	40	38	1949（昭和24）年
立正幼児園	(財)立正芙蓉会	横浜市南区井土ヶ谷上町	25	27	1923（大正12）年
白菊学園	(財)聖体礼拝会	横浜市南区唐沢	25	19	1949（昭和24）年
葉山こども園	個人（代表：天野操）	三浦郡逗子町桜山	20	23	1946（昭和21）年
福田会分院	(財)福田会	三浦郡逗子町	30	33	不明
春光学園	(財)横須賀隣人会	横須賀市小矢部町	80	94	1945（昭和20）年
新日本学院少年寮	(財)新日本学院	川崎市木月住吉	65	50	1936（昭和11）年
鎌倉保育園	(財)鎌倉保育園	鎌倉市大町	100	109	1896（明治29）年
聖園子供の家	(財)聖心愛子会	藤沢市藤沢	160	160	1946（昭和21）年
唐池学園	個人（代表：鶴飼正男）	藤沢市藤沢	30	31	1945（昭和20）年
片瀬臨海寮	東京都同胞援護会	藤沢市片瀬西方	50	49	1940（昭和15）年
成光学園	(財)座間農場	高座郡座間町	50	19	1939（昭和14）年
中心学園	(財)同胞援護会	高座郡海老名町上今泉	30	39	1948（昭和23）年
エリザベス・サンダース・ホーム	個人（代表：澤田美喜）	中郡大磯町大磯	30	29	1948（昭和23）年
薫風寮	薫風寮	中郡国府村生澤	24	27	不明
心泉学園	(財)国民保健会	中郡二ノ宮町二ノ宮	32	48	1940（昭和15）年
白百合園	(財)日本聖保緑会	足柄下郡宮城野村向山	50	57	1945（昭和20）年
恵明学園	個人（代表：田中林太郎）	足柄下郡温泉村小涌谷	40	10	1949（昭和24）年
第二中心学園	個人（代表：藤木たみ）	足柄下郡酒匂町	—	—	1950（昭和25）年

設立年以外の項目は、神奈川県中央児童相談所編・発行『神奈川県中央児童相談所誌』1951年より作成した。設立年は、かながわの児童福祉事業史編集委員会編『子どもたちと歩んだ日々—かながわ・児童福祉事業の軌跡—』（社会福祉法人神奈川県社会福祉協議会、2005年）のほか、各団体の公式ウェブサイトの記述をもとに作成した。

施設のうち、本章では、前号で紹介できなかった唐池学園と、新たな資料が発掘できたボーイズホームの活動について、言及をしていきたい。

(2) 唐池学園の活動

戦後、横浜の戦争孤児を保護するために最も早く新設された保護施設が唐池学園（現、社会福祉法人 唐池学園）である。同園はそれまで全く児童養護の世界とは無関係であった当時満25歳の鶴飼正男とその友人の手によって設立されたことが特徴で、1945（昭和20）年10月に藤沢市郊外の唐池に存在した、旧海軍施設部の判任官宿舎で孤児達の保護を開始した。鶴飼が孤児の保護を志したのは、以下のような動機があった。

何でこの仕事に入つたのかとよく人に問われることですが、やはり特殊な動機がありました。

それは私が関東大震災の折の孤児だつたということでした、あの時、本所被服廠跡で両親と別れた私は養父母に拾われて育てられ成人したのです。

ですから戦争末期になつて、戦災孤児が浮浪児化して巷に流れ出して来たことが、チラホラ新聞に出るようになったことから、彼らの一人か二人を我が子として育てようと思つていました。そうすることが、当時すでに故人であつた、養父母の霊をもつともよろこばせることだろうと考えたからです。²³

ここでは、自らが震災孤児であつたことが、戦災孤児を保護する動機として記されている。鶴飼は東京市本所区（現、墨田区）の厩橋に生

まれ、震災時に本所被服廠跡で両親を亡くすが、鶴飼家で実の子供として育てられ、母の死の直前に自らの出自について知ることになる²⁴。鶴飼はこの事実に感激し、自らも孤児を育てることを決意するが、上野に出ておびただしい孤児が路上生活を強いられている姿に衝撃を受け、本格的な孤児の保護を志すことになる。『所誌』では、天幕保護所の顔役とのいざこざの末に鶴飼が天幕の孤児を保護した事に加え、1951（昭和26）年には31人の孤児が保護されていたことが記されている。

鶴飼は、1952（昭和27）年に『むぎめし学園』（同光社磯部書房発行）を記し、唐池学園の園児の生活について詳細に記録をしている。同書によれば、同園で保護した孤児の中には、医者も投げ出すほど重度の疥癬にかかった孤児や天然痘に罹患した孤児がいたほか、鹿児島から無賃乗車で横浜にやってきた孤児、数日で数千円を稼ぐスリ名人の孤児、皇居前広場に落ちている避妊具を洗って娼婦に販売し巨利を得る孤児、米軍の物資を盗んで刑務所生活を送った経験のある孤児など、過酷な環境下で荒んだ生活を送る孤児の実態が詳細に記されている。また、保護した孤児のなかには頻繁に脱走する者があり、その理由について鶴飼は以下のように記している。

当時は、園児の数人は逃亡常習でした。施設としての設備も不完全な上に、当時の配給状態では三度の雑炊もやつとというのに、横浜に出れば進駐軍ハウスで、我々でさえ羨しくなるような贅沢なおいしいものが、ふんだんに喰べられるチャンスがあつた上に、それが外れても、闇市の手伝いとか、行人の恵みとかで、とにかく喰べるに

²³ 鶴飼正男『むぎめし学園』（同光社磯部書房、1952年）203頁。

²⁴ 鶴飼が自らの出自を知る経緯は、自らも横浜の孤児を養子として育てた作家、壺井栄の『美しい生き方を求めて』（学風書院、1955年）166～167頁に詳述されている。

事かくことはありませんでした。さういう次第で、所謂愛情のみは豊かに注いでも一向にその験が現れなかつたのです。只、ゆきつばなしでなく帰つて来る子がいたのが、些かの取柄でした。²⁵

ここでは、孤児達が施設から脱走する理由として、横浜の市街地で豊富に食物が得られたことが記されている。孤児達が脱走する度に鶴飼は伊勢佐木町や野毛に搜索に出かけ、見つければ施設に連れて帰ったという。中には数十回にわたり脱走を繰り返す孤児もあり、孤児達の育成が極めて厳しいものであったことがうかがえる。鶴飼は、孤児の保護という仕事について、以下のように述べている。

大体こういう仕事は一般の人々の考え方に未だに慈善事業的な匂が残っているのです〔中略〕この仕事について未知の人は、孤児とか浮浪児とかへの同情とか、所謂愛情があれば保姆がつとまると思いがちなのですが、子供を集団でとり扱う、ことに問題児を扱うには高度の技術と理解が要るのです。その上肉体的にしても実に激しい労働ですから厳丈な軀と適当な休養場所がなくでは勤まりません²⁶。

ここでは、単に愛情を持って接するのみでは勤まらない、孤児保護の実相について記されている。同書では、孤児のなかに職員を異常なまでに独占したがる傾向を持つ者があることを取り上げ、その対応に苦心したことが記されているが、それまで孤児を保護した経験のない鶴飼

にとって、現場での模索が如何に困難に満ちたものであったのかをうかがうことができる。

震災孤児が戦争孤児を保護するという鶴飼の活動は世の注目を集め、多くの読者を得た『むぎめし学園』は1953（昭和28）年に東映東京映画によって映画化されることになる。脚色を館岡謙之助、監督を森永健次郎が担当した本映画の内容は、唐池学園で保護された脱走と窃盗の常習犯、草刈義夫に対し、学園長夫婦が様々な努力を重ねるが、結局は挫折して草刈は施設から離れ、強盗殺人犯の共犯となって警察に逮捕されるというストーリーであり、原作に記されている事実をもとに構成されている²⁷。この救われない結末は、鶴飼の「理解に富んだ心の温かい教師がいかに努力しても、又子供の方でもその愛情に応える為によくなろうと努力しても、更正することが出来ないのでお互いが苦しむ、という悲劇が何故とりあげられないのかと思うのです」²⁸という問題意識に根ざしているが、こうした実感は、当時、実際に孤児達を相手にした経験を持つ者でなければ語れない性質のものであると考える。映画評論誌『キネマ旬報』では、「この種素材を扱うにあたつてよくあるケース、“愛情の勝利”を先取した間のいい感傷・問題劇でなかったこと」²⁹が評価されており、原作の持つ力が映画の魅力の大きな部分を占めていることを論じている。鶴飼の『むぎめし学園』は、当時の孤児達と職員の間を知るうえで、重要な資料であるといえるだろう。

(3) 日本厚生団とボーイズホームの活動

日本厚生団の設立

ボーイズホームは、日本厚生団によって中区

25 鶴飼前掲書（註23）12～13頁。

26 同前書66頁。

27 現在、本映画を映像で視聴することは困難であるが、館岡謙之助のシナリオが『映画評論』（第10巻第5号、1953年5月）に掲載されており、概要を把握できる。

28 鶴飼前掲書（註23）206～207頁。

29 池川八郎「日本映画批評 むぎめし学園」『キネマ旬報』（第881号、1953年6月）。

日ノ出町に設立された戦争孤児の保護施設である。同施設の概要については、前号の紀要で簡略に記したが、資料調査の進展により、多くの資料を発見できたため、その詳細について本節で記述する。

日本厚生団は、横浜市戦災者同盟（以下、「同盟」と略記する）を前身とする団体である。同盟は労働運動家の松本健二らによって設立された東京の戦災者生活擁護同盟³⁰の連絡下において1945（昭和20）年10月に設立された団体で、福田忠光を会長とし、奥村宏（写真家）、木下茂（関内食堂経営）、平野恒（白峰会）、黒川フシ（乳児保護協会）らが参加して戦争被害者の保護に努めていた³¹。1946（昭和21）年3月26日付の『神奈川新聞』記事「食、住、仕事を與へ浮浪者の更正へ 戦災者同盟の活動」では、桜木町駅前では仕事がなく路上生活を送る人々に対する同盟の活動を以下のように報じている。

彼等とはもとより無一文で食券や米の通帳などは所持していないし日々不安な生活を続けている。この人々の救済問題こそ、当面最も重要な事業であるところのほど戦災者同盟では、先づ手始めに市内尾上町の関内食堂を開放県の厚生課で食券を貰つて與へ金のないものには無料で、あるものには一食一円で食はせることにした。

かうして先づ食生活を安定してやり、ここ一ヶ月ほどの間に住むところの無いものには住家を、動けるものには働く場所を世話し、一日も早く正常な生活に復帰させるべく努力中である。

本記事では、同盟が関内食堂を開放し路上生活者に食料を提供していたことに加え、住居や職業の斡旋などに取り組んでいたことが記されている。関内食堂は、1944（昭和19）年に決戦食共励会や横浜賄施設組合の会長であった木下茂が、中区相生町に設置した留置所や刑務所用の米を提供した雑炊食堂で、戦後、1945（昭和20）年12月に馬車道鎌倉ビルに移転し、戦災者に海藻麺などを販売・提供していた³²。戦争によって家や仕事を失った人々への救済は、同盟の活動の大きな柱であり、桜木町駅前や市電馬車道門の路上に米軍払下げの天幕を建て、路上生活者や行路病人、戦争孤児の保護を行った。このほか、1946（昭和21）2月28日付の『神奈川新聞』記事「折角寶の山から運び出したが統制に押へられた一萬俵の炭の山 憤る横濱戦災者同盟」では、炭の配給が滞る中で、同盟がバラック住まいの戦災者向けに確保した燃料用の炭が燃料統制組合によって押収されたことに抗議する内容が記されている。

この後も同盟は活動の拡大を続け、1947（昭和22）年5月に社団法人日本厚生団と改組し、法人としての活動を行うことになる。神奈川県立公文書館が所蔵する『昭和22年度 保護施設関係綴』内の「日本厚生団定款」によれば、本団の目的は「本團ハ同胞相愛ノ精神ヲ以テ戦災者、海外引揚者、失業者、其ノ他貧窮者ノ生活ヲ擁護シ其ノ福利ヲ増進スルヲ以テ目的トス」というものであり、「一、生活必需品物資ノ共同購入竝ニ共同生産加工 二、食堂、医療施設、浴場、授産場竝ニ就職斡旋其ノ他福利厚生施設 三、住宅ノ建設、貸付竝ニアパートノ経営 四、戦災遺児厚生施設竝ニ浮浪児収容施設」が活動内容として掲げられている。また、

30 戦災者生活擁護同盟に関しては、小林奈緒子「戦後地域社会における戦災者とその組織－島根県邑智郡川本町を事例として－」『社会文化論集』（島根大学法文学部紀要社会文化学科編9、2013年3月）を参照されたい。

31 同盟結成の経緯については、副理事長を勤めた奥村宏（写真家名奥村泰宏）の写真集、『ヨコハマ・フォト・ドキュメント 敗戦の哀歌』（有隣堂、1981年）に東野伝吉の文章で詳細が記されている。

32 木下の戦前の活動については、木下茂「配給食糧の上手な使ひ方・横濱栄養協會」神奈川県食糧営団編『決戦食生活工夫集』（産業経済新聞社、1944年）を参照されたい。

団員を正団員、賛助団員、維持団員の三種に分け、年額金 31 円の団費を納入した戦災者や引揚者は、正団員となって同団の施設を利用することができることが「定款」によって定められている。具体的な活動については、同資料内の「昭和二十二年七月四日 旧陸軍兵器学校建物払下申請」に詳細が記載されているため、以下に引用する。

本團ノ事業トシテハ左記ノ通り

- 一、横濱市磯子区富岡町元日平産業工員寮ヲ借用之ニ戦災者、引揚者四百五拾世帯（約千五百名）名称「第一、第二谷津坂寮」ヲ収容ス。
- 二、横須賀市沼間町元海軍造兵廠工員寮ヲ縣厚生課ヨリ借用之ニ二百五拾世帯（約八百名）ヲ収容名称「福田寮」
- 三、横濱市中区日之出町二丁目ニボーイズホームヲ新設戦災浮浪児童、浮浪者ヲ収容其ノ厚生ヲ対策（現在五拾名収容）
- 四、前記谷津坂寮ニ於テ収容家族中生活困窮者ノ授産所ヲ開設食品加工工場、ガラス製品見返物資、繭玉製造工場、ミシン加工工場等ヲ経営
- 五、ボーイズホームニ於テ靴修理工場、木工場（戦災浮浪児童、浮浪者）更生準備中
- 六、伊勢佐木町一丁目及ボーイズホームニ於テ授産所トシテ遺家族ノミシン加工経営

本資料は、日本厚生団が横浜駅前の市有地を借用し、引揚者、遺家族、復員者等の宿泊施設および傷痍軍人遺家族等の生活援護のための住宅兼売店を設置する事業を新規に開始する際に、旧陸軍兵器学校の建物の払下げを大蔵大

臣に申請する際に作成された文書で、同団の 1947（昭和 22）年 7 月までの実績が列記されている。ここでは、戦災者や引揚者の住宅のほか、戦争孤児の保護、授産所の設置など、多様な活動が展開されていたことが把握できる。同文書内では、「會員ハ六萬二千八百世帯ニ達シテ居リマス」と記されており、相当数の団員が同団に所属していたことがわかる。この文書で申請された施設は、その後の資料からは確認できないため、設立されなかったと思われるが、同団ではさらに多数の事業を展開してゆくことになる。

同団の活動中、現在でも活動を継続している施設が、一般社団法人日本厚生団長津田厚生総合病院である。同団が発行した『創立 20 周年記念のしおり』³³には、設立経緯について以下のように記されている。

有史以来の未曾有の敗戦により、疲弊と困憊に陥った日本に発生した戦災貧窮者と、その廃墟に軍人の復員と海外移住者の引揚が続々と行われ、食料不足と、失業と、住宅不足とによって大混乱が起ったその中で、現理事長福田忠光先生の主唱により日本厚生団が結成され、その戦災引揚者の授産、住宅斡旋、孤児収容等の事業が行われた。しかし貧困と食料不足との悪条件下、市民の体位は低下し、栄養失調により疾病は急速に蔓延し始めたことから、かねてより治療と予防衛生の必要を力説していた現病院長戸田修先生の力を得てこゝに医療事業がもり込まれ、当院創立の源が発生したのであります。

ここでは、戦後の食糧難による栄養失調から来る疾病の蔓延に対し、同団が病院を設けたことが記されている。初代病院長の戸田修は慶應

33 鈴木啓三編『創立 20 周年記念しおり』（戸田修発行、1975 年）。

義塾大学医学部卒業後、南満州鉄道株式会社新京満鉄防疫所長、保険部長を歴任した人物で、細菌研究を専門としていた。1946年（昭和21）に帰国したのち、日本厚生団の理事となり、ボーイズホーム内の診療所で困窮者の診療にあたり、1949（昭和24）年、同ホームの隣接地に建設された厚生病院の院長となる。また、日ノ出町周辺は私娼が多く存在した地域で、1951（昭和26）年には衛生科学研究所を開設、神奈川県衛生部と協力して性病治療などに多くの功績を残した。この後、戸田は1955（昭和30）年に、当時病院の無かった田奈地区の有力者に請われ、長津田厚生病院（現長津田厚生総合病院）を開設し、地域医療に大きく貢献することになる。このほかにも同団では1950（昭和25）年に中区長者町で市内の修学旅行を多く扱う旅行協会を設立するなど、積極的な活動を継続して進めてゆく³⁴。このような事業によって、戦争孤児の保護施設であるボーイズホームは安定した運営が可能となったのである。

ボーイズホームの活動

ボーイズホームは、同盟が横浜駅や桜木町駅前で路上生活をしていた戦災者や行路病人に対して天幕を建てて保護した際、紅葉坂教会の牧師であった平賀孟が戦争孤児の保護を主張し、5つの天幕で約50名の戦災孤児を保護したことをきっかけとして誕生した施設である。ボーイズホームの後身施設である神奈川県茅ヶ崎市の社会福祉法人 福光会 子どもの園が作成した同園の「沿革³⁵」には、ボーイズホーム設立経緯について、以下のように記されている。

昭和20-21年 横浜・桜木町で平賀孟氏が
戦災にあった子どもと共に

生活を始める。テントを横浜戦災者同盟から借り受ける。一方、内山岩太郎知事を尋ねて家屋建設の協力を要請する。

昭和21年12月 横浜・日の出町の子の神社境内（国有地）に、神奈川県で横浜戦災者同盟が施設を建てる。応急に旧軍隊の兵ちょうの解体材を使って、清水組が建設に当たった。当初、厚生同胞寮と名づけられた。

昭和22年4月 1日より児童名の記録が残されている。

昭和22年5月 フラナガン神父が児童福祉の推進とその勧告に來日、その際、來園し、これを機会にBOYSHOMEと名づけられる。そして、同盟は社団法人日本厚生団として登録される。

ここでは、ボーイズホームの建設に当たり、神奈川県が相当の援助を行っていたことが把握できる。同盟の会長であった福田忠光は、神奈川県商工課長を務めた人物で、神奈川県知事の内山岩太郎や副知事の角田栄太郎と近い間柄にあり、横浜市長の半井清や平沼亮三とも懇意であったため、このような援助要請が通り易かったのではないかと推測できる³⁶。ボーイズホームの建材は厚木・相模原に存在した旧日本軍施設の解体材や古材が用いられ、木造トタン葺き二階建ての構造であったが、バラックに近いものであり、常に修繕が必要であったという。

34 「社団法人 厚生団経歴」（長津田厚生総合病院所蔵）による。同病院のウェブサイトでも閲覧可。

35 子どもの園編・発行『子どもの園案内』所収資料。

36 神奈川県新聞社編・発行『反骨七十七年-内山岩太郎の人生』（1968年）245～246頁の記述による。同書では神奈川県商工指導所の事務所が日本厚生団の本部内に間借りしていたことなど、県との関係が深かったことをうかがわせる記述が見られる。

当初、ボーイズホームは厚生同胞寮と呼称されていたが、米国の児童福祉家、エドワード・ジョゼフ・フラナガン神父が連合国軍最高司令官であるダグラス・マッカーサーの招聘を受けて来日し、全国の戦争孤児の保護施設などを視察した際、平賀孟の尽力によって厚生同胞寮が視察対象となり、これが契機となって、フラナガン神父が提唱した「少年の町」にちなみボーイズホームと改称されることになった。

平賀孟はボーイズホーム設立直後に渡米し、園長の立場を降りるが、代わって2代園長となった竹下福寿が同ホームの孤児達の養育に大きな役割を果たすことになる。同ホームの特徴は、比較的高学年児や就労児童などの男子のみを保護したことにあり、荒んだ路上生活を強いられた孤児達の中には、気性が荒くトラブルを頻繁に起こす者も複数存在したという³⁷。同ホームではこのような子どもたちを積極的に受入れ、特色ある養育を行っていた。園長の竹下の経歴について、1961（昭和36）年10月18日付『神奈川新聞』では以下のように記している。

とにかく竹下園長という人が変わっている。変わっているというだけでは誤解をうけるおそれがあるが「鬼」といわれた空の爆撃隊長から「父」と慕われる児童施設の長になったのだから変わりようははげしい。古い話になるが昭和七年に陸軍士官学校を卒業、軍神として空に散った加藤隼戦闘隊長の教えをうけた。前線にあった竹下少佐は急降下爆撃の第一人者だったそうだ。それが終戦と同時に都下青梅市の禅寺にイントンしていたが、軍隊当時に知りあった人から社団法人日本厚生団で働くことをすすめら

文化研究部編成									
ヒマワリ編集部	菅	青木	上路	察氏	小森	山田	上野	1/ヒマワリ会編成	2/ヒマワリ会編成
科学研究指導部	上路	鈴木	保崎	察氏	山田	小森	上野	1/科学研究指導部編成	2/科学研究指導部編成
図書部	山田	田中		察氏	菅	青木	鈴木	1/図書部編成	2/図書部編成
文学部	上路	山田		佐伯	菅	青木	鈴木	1/文学部編成	2/文学部編成
美術部	菅	小林		察氏	菅	青木	鈴木	1/美術部編成	2/美術部編成
音楽部	小林	小西		佐伯	菅	青木	鈴木	1/音楽部編成	2/音楽部編成
演劇部	上路	山田	保崎	察氏	菅	青木	鈴木	1/演劇部編成	2/演劇部編成
園芸部	高梨	青木		高橋	菅	青木	鈴木	1/園芸部編成	2/園芸部編成
体育部	上路	小林		高橋	菅	青木	鈴木	1/体育部編成	2/体育部編成
部友	部友	部友	部友	部友	部友	部友	部友	1/部友編成	2/部友編成
備考	今日本日主任者全同 翌日：日近、各部月報、報告書提出								

【図1】文化研究部編成

れ、奇縁がこの道にはいる動機となった。

終戦時、陸軍中佐であった竹下は、著名な航空士官であり、戦時中の新聞でも数度取り上げられている³⁸。同ホームでは軍人上がりの竹下によって厳しい指導がなされていたことが卒園者の記録から明らかになっている³⁹。しかし、竹下の指導は厳しさ一辺倒のものではなく、園児達の情操教育に対する配慮も為されていた。特に力を入れたのが、雑草で作る押し花作品で、アメリカにも贈られるなど、優れたものであったという⁴⁰。また、同ホームでは、園内に様々な部活動を設けて、園児達が学校や職場から帰った後に様々な活動を行う取り組みが為されていた。この部活動の活動記録が毎月園児達の手によって発行された『ひまわり』である。【図1】は『ひまわり』の発行1周年記念誌である1948（昭和23）年10月発行の第13集に収録された「文化研究部編成」で、ここからは同ホーム内に、①ひまわり編集部（「ひまわり」企画・編集、児童文化の向上）、②科学研究・指導部（時事研究、

37 ボーイズホーム3代園長、現、(福)福光会子どもの園園長の和田直熙氏の証言による。

38 「空陸協力香口鎮の敵を猛攻」1940年3月26日付『朝日新聞』、「半身不随機沈着に救はる」1941年2月1日付『朝日新聞』など。

39 「あすなろたちは語る」『あすなろ』（第15号、1977年3月）。

40 中部社会事業短期大学編『輝く奉仕者近代社会事業功労者伝』（近代社会事業功労者伝刊行会、1955年。2003年に『社会福祉人名資料事典 第3巻』として復刻）506頁。

報告整理指導、工作類の特別企画)、③図書部(備付図書の整理、必要・希望図書購入〔特に科学図書〕)、④文学部(作品の創作、作品の企画募集)、⑤美術部(絵、習字等の創作・募集、寮内の装飾、美化)、⑥音楽部(技術の練磨と素差の向上、コンサートの催し、音楽会の鑑賞)、⑦演劇部(演劇の企画と研究、出演、部外出演の企画)、⑧園芸部(寮外周の花壇栽培、野菜類の栽培)、⑨体育部(野球、卓球、相撲振興、各道具の整備)の9つの部が存在していたことがわかる。各部の責任者は毎月末日に会同することと、翌月5日までに月報と報告書を提出することが求められており、これをもとに『ひまわり』が編纂されていたことがわかる。『ひまわり』発行の様子がわかる文章が第13集に以下のように掲載されている。

僕等の寮に文化研究部が出来て其の研究をまとめた“ひまわり”を発行し出してから一年は夢の如く過ぎ去りました。

過去を振り返り見ますれば昨年十月の創編より先月九月号に到る迄着々と歩を進めて内容も段々と充実して来た立派な“ひまわり”が発行されてきました。

此れは皆さんが一ヶ月の勉強を精一杯に發揮して編集に協力して下さったからだと思います。〔中略〕最初の間は編集を先生にやって戴いて居りましたが先生も忙しくなり僕達も人数が増えたので編集を僕達の手でやる様になりました。何分僕達は字が下手なので上手に清書する事は出来ませんでした事を皆さんにお詫び申し上げます。又今月から大抵の人達が自分の作文を清書して下さいますので僕達も大助かりです。

〔中略〕“ひまわり”は皆の手で作り皆で楽しむ皆の雑誌なのですから皆さんの方でも此の様な事を“ひまわり”に掲げて貰い度

いと云う希望が有ればどしどし申し込んで下さい。社会、文化、科学、凡ゆる方面に於て今迄より立派な“ひまわり”を発行し度いと思って居ます。

それには皆さんの魂のこもった作文、生きた画等を今迄より以上に投稿して下さいます。では皆さんのすばらしい原稿を楽しんでお待ちしております。

ここからは、『ひまわり』が1947(昭和22)年10月から発行されたこと、当初の編集は竹下の手によっていたが、園児達の手によって編集されるようになった事、作文や絵画などの投稿を受け付けていたことなどがわかる。同ホームは工場や商店などで働く勤労児童も多く存在したため、年長者が主導となって部の運営や『ひまわり』が編纂されていたと推測できる。『ひまわり』の内容は、政治や社会関係の特に社会事業関連の新聞記事の切り抜きが収録されることが多く、園児達が新聞をよく読むように指導されていたことがうかがえる。また、絵画や俳句、小説など、部活動の活動成果と考えられる作品も多く収録され、多様な部活動が活発に展開されていたことがわかる。同ホームは、他の施設が郊外に設置されていたことに対し、繁華街の中心部である日ノ出町に存在していたことが特徴で、夜の町に子どもたちが再び戻ることのないよう、様々な配慮がなされていたことがうかがえる。このような活動の成果によって、同ホームでは学業が優秀な生徒を多く輩出し、渋沢多歌子(学校法人青淵塾渋沢国際学園創始者)によるタカラクラブの戦争孤児向け奨学金を得るものも複数出ていた⁴¹。

また、『ひまわり』には毎号定期的に園児達の作文が収録されており、「夏休みの計画」や「職場の向上について」など、共通のテーマで書かれた作文が収録されているが、新しく入園した

41 同前書 506 頁。

園児には、入園の経緯を書かせることが慣習であったようで、どのような環境下で同ホームに保護されたのかを、当人の筆によって知ることが出来る。一例として、1949（昭和24）年7月号（第22号）に掲載された園児の作文を以下に紹介する。

外にいた時とホームに来てから

僕が家を出たのは、昭和二十一年の五月三十日である。それから行く所もなくあてもないので尾道の駅で三日間何にも食べないで寝ていた。何も食べないので動く事もどうする事も出来なかった。僕は家に帰ろうと思ったが、お母さん、お父さんはいないし、一たん出たので帰る事は出来ないと思ひそれから汽車に乗って和歌山のおばあさんの所へ行った。

おばあさんの所へは十日くらいおられたけれど、おばあさん一人では養へないので又そこから出され、僕はもう行く所がないので、ただ、ほうぜんとふら〜していたが、運よくけいさつの人たちにひろはれ、大阪の愛育社におくられた。そこから毎日学校へ行っていたけれど、ふとした心からいやになって逃げて東京へ行った。上野保ご所へ行った。そこから〇〇（筆者注：伏字は筆者）へまわされ、真面目に一年半学校へ行ってたけれどあまり寮長さんがひどいのでたまらなくなって四人で逃げてしまった。それからボーイズホームへ来たのである。僕がここに来たのが七月二十七日の午前中であった。僕がふと思ったのは皆んな勉強していたので学校へ行かないのかと思った。後できいてみたら夏休みだった。

それから大きい人たちがたくさんいるので、みんな先生かと思った。

僕は始めて来たのだから始めの日は何んにもわからなく、誰も相手にしてくれない

のでつまらないと思ったが、その夜は映画も見に行けたしだんだん人も僕に親切にして来てる様に思った。

それから明日は泳ぎにつれていってもらったし、お風呂へはいけたし、日曜日はお小使までもらってつくづくここは良いと思った。

末の海水浴と箱根のキャンプを期待している。

この園児は、広島県尾道市周辺と思われる地域に、孤児として親戚などに預けられたこと想定されるが、何らかの事情で逃げ出し、和歌山の祖母の家へ身を寄せる。しかし、祖母が養育できなかったため、警察に保護され、大阪の施設に入所するも、ここを脱走し、東京へ出て施設に入るが、また脱走して横浜にたどり着き、ボーイズホームに入所したことがわかる。最初に居住していた場所から、この園児は原爆被害を受けて両親を失った孤児であった可能性も考えられるが、非常に遠方から施設を転々とし、同ホームへとたどり着いた過酷な戦争孤児の境遇をうかがうことが出来る。また、『ひまわり』1948（昭和23）年5月号第8集には園児の心境が把握できる以下の作文が収録されている。

ボーイズホームに来てからの思い出

僕は此の頃皆んなが寝た後、消燈ラッパをきくのが楽しみになった。どうしてかと言ふと、家の事を思ひ出すからである。今頃お母さんはどこにいるのだろうか。今頃天国にいるのだろうか。それとも地獄にいるのだろうか。それともまだ生きているのだろうか。僕はいつもこういふ事を考へる。僕は此の頃お母さんのことを思ひ出す。

僕は何時も聖堂で礼拝する時お母さんに早く逢える様にとお祈りする。僕は大きくなって船員になりお母さんに逢ふと思ふ。

ここでは、いかなる状況であるかは不明であるが、母親が生死不明の状態であり、母の愛情を求める園児の心境が読み取れる。このほかに、横浜駅前で靴磨きをしていた園児が、「浮浪児狩り」によって戸部警察署に送致され、第一児童保護所から同ホームに保護されるまでを詳しく記した作文などがあり、当時の戦争孤児達が体験した保護に到るまでの状況が把握できる。戦争孤児自身が保護の直後に自らの境遇について記した資料は、横浜市内では管見の限り『ひまわり』が唯一の資料であるといつてよく、保護施設に保護された孤児の境遇と心境を知る上でも、本資料は貴重な一次資料であると言える。茅ヶ崎市の子どもの園には、同ホームが作成した多くの資料が保存されているため、今後とも調査・分析を進めていきたいと考える。

第2章

神奈川県の子引揚孤児に対する保護

(1) 神奈川県の子引揚孤児の概要

厚生省による1948（昭和23）年の「全国孤児一斉調査」では、神奈川県には275人の引揚孤児が存在しており、このうち81人が施設で保護されていたことが記録されているが、このような孤児が存在する大きな要因として、横須賀市の浦賀港が引揚港となったことが考えられる。浦賀港では1945（昭和20）年10月2日に引揚第一船の氷川丸が入港して以来、1947（昭和22）年までに軍人の復員および一般邦人の引揚げを含め、56万人以上もの人々が同港に上陸している。同港から引揚げた一般邦人は、中部太平洋諸島や南洋諸島に移住した人々が多く、沖縄県からの移住者が多いことが特徴であり、このなかに多数の孤児が存在していた。引揚者の保護のために1945（昭和20）年11月に

設置された、厚生省の浦賀引揚援護局が編纂した『浦賀引揚援護局史⁴²』（以下、『局史』と略記する）には、フィリピンからの引揚孤児が最も多い72名（ダバオ60名、レイテ2名、マニラ10名）で、パラオ10名、サイパン8名、クサイ（現、ミクロネシア連邦コラスエ州コラスエ島）3名、ハワイ2名、テニアン2名、ロタ2名、小笠原1名、計100名の引揚孤児が浦賀引揚援護局で保護されたことが記録されている。これらの子どもたちが孤児となった背景について『局史』は以下のように記している。

引揚者の中には数に於ては必ずしも多くはないが、かなりの孤児がある。殊に引揚開始当時は、優先的に最も状況の悪い方面から着手された関係上孤児の数も多かった。昭和二十年末ダバオから引揚げた中には孤児の集団もあつた。ジャングルを敵の砲爆撃に追はれて逃げる間に親を失つた子供達が集まつて自ら集団化したのが生き残つたのである。

引揚船の中で更に上陸してから収容所の中で子供の手を握つたまゝ、息絶えた親達も多かった。こうして生じた孤児が最初の内は沢山あつたのである。

ここでは、激戦地となったフィリピンで、戦闘中に両親を失つた子どもたちや、引揚げのさなかに両親が息絶えたケースなどが紹介されており、戦時・戦後の過酷な環境下で多くの子どもたちが孤児となったことが把握できる。また、ダバオでは孤児が集団で引揚げたことが記載されており、ダバオからの引揚孤児が多数存在する理由が把握できる。孤児達の年齢は、100人の引揚孤児のうち、3～10才の孤児達が58人（3才2人、4才2人、5才5人、6才3人、

42 小稿では、『局史』の復刻本である、加藤聖文監修、編『浦賀引揚援護局史（上）』（海外引揚関係史料集成、国内篇、第2巻、ゆまに書房、2002年）の情報を記載している。

7才18人、8才9人、9才12人、10才10人)で、11～15才が33人(11才13人、12才8人、13才6人、14才5人、15才1人)、16才以上が6人と多くの孤児が手厚い保護を必要とする年齢であったことがわかる。

このような引揚孤児達は、一般邦人の一時保護施設である、浦賀引揚援護局内の鴨居援護所に保護された後、身寄りのある者は近親者に引き取られ、無縁故の者は社会事業施設で保護されることとなった。【表2】は『局史』に掲載されている孤児達の引取先を記した一覧である。ここでは、1945(昭和20)年11月から12月までは金沢郷に孤児達が委託保護され、12月以降は春光園が委託先となっていることが把握できる。また、金沢郷に保護された孤児は、

春光園と葉山子供園に移されたこともわかる。引揚孤児の保護に大きな役割を果たした金沢郷、春光園、葉山子供園とはどのような施設であったのか、本章では、施設の記念誌や体験記から、その活動について紹介する。

(2) 総合社会事業 金沢郷

【表2】のとおり、引揚げ開始直後における引揚孤児の保護の中心は金沢郷であった。金沢郷は、1945(昭和20)年10月に神奈川県が設置した浦賀引揚民事務所の所長であった吉村良司の発案によって誕生した、国内に定着先の無い引揚者の保護を主な役割とした施設である。金沢郷の運営は、戦前から活動を継続していた、神奈川県の社会事業団体の連絡機関、神奈川県

【表2】浦賀港で保護された引揚孤児の引取先一覧

取扱年月日	孤児員数	引揚地名	委託先	その後の移送先等
1945年11月14日	11名	比島、ミンダナオ、ダバオ	金沢郷	5名横須賀隣人会(春光園)へ 2名葉山子供園へ 4名近親者引渡し
11月15日	5名	比島、ミンダナオ、ダバオ	金沢郷	1名死亡 3名春光園へ 1名葉山子供園へ
11月20日	10名	比島、ミンダナオ、ダバオ	金沢郷	3名春光園へ 1名死亡 2名葉山子供園へ 4名近親者引渡し
11月21日	4名	比島、ミンダナオ、ダバオ	金沢郷	全員春光園へ
12月10日	2名	比島、ミンダナオ、ダバオ	金沢郷	1名春光園へ 1名近親者引渡し
12月18日	36名	比島、ミンダナオ、ダバオ	春光園(30名) 金沢郷(6名)	1名死亡 6名葉山子供園 6名本籍沖縄県 9名近親者引渡し
1946年1月7日	2名	ハワイ	春光園	
1月13日	2名	クサイ	春光園	1名本籍沖縄県
1月20日	17名	ダバオ(4名)、サイパン(8名)、テニアン(2名)、小笠原(1名)、ロタ(2名)	春光園	6名本籍沖縄県
2月14日	10名	パラオ	春光園	
計	100名	備考：本表の他14名は保護所より直接縁故者又は篤志家に引渡し又は委託した		

加藤聖文監修・編集『浦賀引揚援護局史(上)』(海外引揚関係史料集成 国内篇第2巻、ゆまに書房、2002年)所収「孤児取扱状況」(139～140頁)より作成。

私設社会事業懇話会の有志 11 団体が、財団法人戦災援護会神奈川県支部（現、社会福祉法人恩賜財団神奈川県同胞援護会）から依託されて担当しており、引揚者の保護のみならず、戦災者や戦争孤児、母子家庭や要介護老人など、様々な戦争被害者を保護する「総合社会事業」を目指したことが特徴的な施設である⁴³。1945（昭和 20）年 11 月に開郷した金沢郷は、磯子区（現、金沢区）町屋町と平潟町に存在した旧海軍航空技術廠工具舎の建物を大蔵省から借り受けて使用しており、このうち平潟町の第二金沢郷が引揚孤児の保護を担った。

金沢郷では、県下 11 の社会事業団体がそれぞれの特性を活かして引揚者や戦災者の保護を行ったが、第二金沢郷では財団法人 幼年保護会⁴⁴（現、社会福祉法人 幼年保護会）が担当となり、引揚孤児の保護を行った。同会は、1906（明治 39）年に小田原の少年刑務所で幼年犯罪者の管理に当たっていた横浜刑務所典獄の有馬四郎助が、少年犯罪の原因の多くが成育途上の境遇の結果であることを思い、釈放者を救済する教育機関の必要性を痛感したことから設立された組織で、同年 6 月に小田原に幼年保護会矢津力行舎および小田原家庭学園が設立された。1907（明治 40）年には横浜市根岸町で少年女子釈放者の保護を開始し、1909（明治 42）年に女子感化部の根岸家庭学園、男子保護部の根岸力行舎を開設、翌年財団法人の認可を得た組織である。同会の家庭学園は日本における女子感化院の嚆矢となるものであり、設立の翌年には県の代用感化院となり、県外的女子保護設備のない他府県の委託を受けて多くの女子達を保護していた。1914（大正 3）年には入所者の増加から、横浜市保土ヶ谷区釜台町の旧県立感化院薫

育院の敷地に移り、現在でも、さまざまな原因で家庭や学校・社会で生活することが難しくなった女子児童を保護し、キリスト教プロテスタント主義の教育のもとで地域や社会に出るための生活自立支援を行っている。

幼年保護会では、前田直蔵⁴⁵が第二金沢郷の責任者となり、住み込みで孤児達の保護を担った。前田は戦前、関東学院の講師と家庭学園の主事を務め、戦後、金沢郷で引揚孤児を保護した後、知的障害児の保護施設である県立ひばりが丘学園の主任指導員を経て、1954（昭和 29）年に公的な施設では保護をしきれない知的障害児の為の施設、恵和学園（現、社会福祉法人 恵和）を設立した人物である。第二金沢郷を任された経緯について、前田は以下のように回想している。

終戦の四月、家庭学園の主事と関東学院の講師をしていた私に第二回の召集がきた。九月二十日に帰郷。

有馬純彦（筆者注：幼年保護会会長）が懇話会で引揚者の世話をすることに決った。金は県が持ち、宿舎は海軍工廠の寮舎ということで、私が行くよう指示された。

十月二日～三日、引揚に関して忙しい吉村さん（筆者注：神奈川県浦賀引揚民事務所長、吉村良司）と宿舎を見に行った。量は湿ってきのこがはえていた。〔中略〕

第二金沢郷が家庭学園ということになったのは、フィリピンの引揚孤児が浦賀にいたので、それを扱うので少し離れたところが良いということになり「海の家」と呼ばれていたのを、コロニーと呼ぶことにした⁴⁶。

43 金沢郷についての詳細は、拙稿前掲論文（註 15）を参照されたい。

44 幼年保護会についての記述は、（福）幼年保護会家庭学園編・発行『学園の栞』および、前掲『輝く奉仕者近代社会事業功労者伝』（註 33）511～512 頁の情報による。

45 前田の経歴については、恵和学園編・発行『創立三十年史』（1984 年）7 頁の記述による。

46 恩賜財団神奈川県同胞援護会編・発行『金沢郷と引揚援護』（1988 年）61 頁。

ここでは、復員直後に前田が第二金沢郷の責任者に任命されたことと、第一金沢郷の引揚者・戦災者とは離れた場所にある第二金沢郷に引揚孤児を保護する配慮がなされたことがわかる。過酷な状況下で両親を亡くし、心身共に極限状況にある引揚孤児の保護には、日頃、繊細な対応を求められる少年少女を保護してきた、同会のベテラン職員が対応することが望ましいと判断した上での措置であったことがうかがわれる。「金沢コロニー」と呼ばれた第二金沢郷での引揚孤児受入時の様子および生活の状況についても、前田は以下のように記している。

準備が出来、引き取りに行くと引揚事務所では狭い部屋で周りに遺骨箱が高くつまれているところで、吉村さんが一人で忙しく事務をとっていた。

現場に行くと、フィリピン引揚孤児が夏着で毛布にくるまってふるえていた。トラックで金沢まで送るということであったが、当時は病人と死者の輸送でその暇がなかった。仕方がないので一日に二人だけにし、一人をせおい、一人をかかえて浦賀駅の階段を昇り、八景で降り寮までそんな思いで、約一〇人から一五人位をはこんだ。中には翌日まで待ってもらったら死んでしまったということもあった。

早速着物に困って、学園から女の子の着物をもってきて男の子に着せたり、その後軍服が払い下げになり、女の子に衿元だけ変えてししゅうを付けてごまかした。

食事は家庭学園から運んだ。時には、地元漁協が平ら貝を籠一杯もってきてくれたが、困って県庁へ「食事と寝具が足りない」ととなりこんだこともあった⁴⁷。

この記録からは、一刻を争う状況下で孤児達が保護を待っている状況が把握できる。当時、浦賀港への引揚船ではコレラが発生するなど、上陸を目前にしながら死亡する人々が多く存在し、引揚者のほとんどが病気などのために衰弱している状況であった。孤児達のなかにも、上陸後に亡くなる者が存在したことが本記録からわかる。金沢郷では、老朽化した建物を修繕する必要があったほか、引揚者の多くが着の身着のままで引揚げてきたため、金銭的余裕がない人が多く、その運営は困難を極めていた。第二金沢郷でもその状況は変わらず、食料や寝具、衣服などが不足していたこともわかる。

当時の第二金沢郷の運営状況については、幼年保護会が保存している「金沢コロニー出納簿」⁴⁸によってその実態を推測することが出来る。本資料からは、1945（昭和20）年11月1日の金沢郷開郷から12月までは、県などの補助金により運営が順調に行われていたが、引揚げが本格化する1946（昭和21）年以降、補助金の支払いは滞りがちとなり、幼年保護会の持ち出しでの運営が続いていることが把握できる。当初、県から十分な運営資金の援助が与えられる予定となっていたが、その約束の履行は困難であったらしく、県では「金沢郷では神奈川県下で、とにかく大変な所で、県庁にいけば、金沢郷の話は持ってこないようにしてくれと敬遠されたという。それ程、問題の多い所だったんです」⁴⁹という証言が残されているように、県の手に負えない状況になっていたことが推測できる。前田の回想にも、県に衣食住環境の改善を訴えた経験が記されているが、最も大変な状況下では、自前で費用を捻出する必要があったことがうかがえる。また、本資料からは、公的機関のみならず、様々な団体から寄附が送ら

47 同前書 61～62 頁。

48（福）幼年保護会蔵「〔昭和二十・二十一年度 姉の会・金沢コロニー出納簿〕」（資料目録 No.128）。

49 恩賜財団神奈川県同胞援護会編・発行『同胞援護会 35 年のあゆみ』（1982 年）16 頁。

れたことがわかる。1946（昭和21）年1月3日には、めくみキリスト教会から30円、同年1月23日には山手女学院より100円、同年1月2月8日には捜真女生徒より50円など、宗教団体やキリスト教系の女学校の生徒などからの寄附の他、同年12月10日には「白人無名氏」より300円など、個人からの寄付があったことが資料には記されている。第一金沢郷では、皇室からの援助のほか、女学生などが多くボランティアとして活動していたが、第二金沢郷でも市内の各所から様々な援助があったことがうかがえる。

神奈川県私設社会事業懇話会11団体による第一、第二金沢郷の運営は、引揚者の上陸が一段落した1946（昭和21）年10月で終了し、運営は委託元の神奈川県恩賜財団同胞援護会の手に移譲されることになった。この時期には、金沢郷の引揚孤児は他の社会事業団体の施設に移っているが、孤児達が生死の境をさまよう状況下において、献身的な活動を行った幼年保護会の果たした役割は大きいものであったといえよう。

(3) 横須賀隣人会春光園の活動

『局史』の【表2】からは、浦賀引揚援護局内で保護された引揚孤児の内、社会事業団体に引き取られた孤児は100名おり、そのうち最も多くの孤児が春光園に引き取られたことがわかる。第二金沢郷で保護された引揚孤児達も、多くが春光園に移っており、本施設が神奈川県における引揚孤児保護の最大の拠点となったことは明らかである。

この春光園とは、1922（大正11）年に横須賀市に設立された、横須賀隣人會を母体とした施設である。春光園を設立した樋口宅三郎⁵⁰は、1901（明治34）年に宮城県仙台市で生ま

れ、4才より岩手県釜石市の鉱山で成長したのち上京し、1920（大正9）年に横須賀市の相模中央新聞社に入社、以後、『大阪日日新聞』、『横浜日日新聞』の記者を務め、1931（昭和6）年に横須賀市に戻り、『横須賀日日新聞』を創刊、同紙が1940（昭和15）年8月に『神奈川日日新聞』と改題され、1942（昭和17）年2月に神奈川県下の新聞が『神奈川新聞』に統合されると同時に、神奈川新聞社の取締役社長に就任するという経歴をたどった新聞人であった。樋口は新聞記者としての業務の傍ら、横須賀隣人会⁵¹の活動にも深く関わり、同会の理事を務めていた。同会は貧困層の市民を救済するために授産事業と保育事業を展開し、1940（昭和15）年には海軍監督工場としてミシン133台を備え、130名が就業するなど、日本有数の大授産場へと成長を遂げる。しかし、敗戦と共に授産事業は一時休業に追い込まれるが、いち早く児童福祉分野の取り組みに全力を注ぐという方針を決定し、1945（昭和20）年11月に三和保育園（現、社会福祉法人 春光学園 三和こども園）が開設されたほか、同年12月に、引揚孤児の保護のために樋口によって春光園が設立されることになった。この後、1952（昭和27）年に社会福祉法人に改組した際、財団法人横須賀隣人會を社会福祉法人春光学園と改称して現在に到るまで活動が継続されている。

春光園設立当時の引揚孤児の様子について、樋口は春光学園の十周年記念誌、『人生の路地 第二集－養護施設の十年－』（神奈川新聞社、1955年）において以下のように記している。

私たちが南洋諸島の引揚孤児を迎えて開園したのが、昭和二十年十二月二日、薄れ陽の小寒い午後であった。横須賀市浦賀町鴨居の引揚同胞一時収容所に、敗戦の混乱

50 樋口の経歴は、前掲『輝く奉仕者近代社会事業功労者伝』（註40）503頁の記述による。

51 同会の記述は同前書521～522頁の記述による。

から振かえるものもなく、捨てられた犬の子猫の子のように、痩せ衰えたる骨と皮ばかりの孤児が三十人あまり、当てもない引取人を待っていた。一枚の蒲団に二、三人ずつもぐって横たわっていた。遊ぶ気力も体力もない。目ばかり大きく、しかも生気がなくどんよりと見開いて、名前を聞いても答えもしない。声さえ出なかったのである。〔中略〕

引揚げ孤児たちは、一人として栄養失調ならざるはなく、顔色は土色で、もうこの上は痩せたくても、痩せられぬという状態にあった。〔中略〕トラックから抱き下ろしても、ちゃんと地面に立つ子は一人もない。地面に立たせると、すぐしゃがんでしまう。そのまま地べたにくずれて寝てしまうさえある。玄関までのわずか六尺あまりを歩行し得た子はわずかに三人であった。

同書は「この社会から悲劇を一掃するには、社会にこの悲劇の姿を見ていただかなくてはならない」という樋口の思いによって記されているため、引揚げ孤児の状況がありのままに記録されている。ここでは、身体・健康状況のみならず、精神的にも衰弱しきった孤児達の姿をうかがうことが出来る。同書には、栄養失調から疥癬にかかる孤児達が多く存在し、職員全員が疥癬をうつされながらも孤児達を硫黄風呂に入れ、介抱したことなど、非常な努力のもとで同園の運営が行われていたことが記されている。南方で暮らしていた子どもたちにとって、日本の冬は厳しいものであったらしく、引揚げ後一月以上は食事以外に動くことのできなかった者が多かったという。しかし、このような状況は冬が過ぎると共に改善していった。同書では状況の改善について以下のように記している。

南方の子供たちも一と冬越したらようや

く元気になってきた。霜枯れの草が芽生えてくるように。あれほどひどかった栄養失調もララ物資や土地の新生横須賀婦人会の好意で進駐軍の栄養食（残飯をこう称した）それは一週一度の配分であったが、脂肪とタンパク源はこれ以外になかった。内外のこれらの好意でどうにか子供らしい顔になってきたのである。体力さえつければ子供は現金なもので、部屋に閉じこもっているものはない。

ここからは、1946（昭和21）年11月30日に第一船が横浜港に入港したことを皮切りに、1952（昭和27）年まで送られたララ物資や、米軍の残飯などで孤児達が栄養を付け、徐々に回復していく様子がうかがえる。春光園では、50余名の引揚げ孤児を保護したが、早い者は半年後に祖父母や叔父叔母など、親戚が判明して引き取られ、身寄りの無い23名（男子11名、女子12名）が同園で継続して保護されたという。同園ではこのほかにも戦争孤児や浮浪児を多数保護しており、現在でも当時の資料が多く残されている。昨年、2015（平成27）年に開園70周年を迎えた同園では、所蔵資料を多数収録してその事績をまとめた記念誌『社会福祉法人春光学園七十年のあゆみ』を発行しているが、今後も同園の資料の調査・研究によって得られる成果は、戦争孤児研究に大きく資するものであると考える。

(4) 葉山子供園の活動

春光園以外に、【表2】で引揚げ孤児を受け入れた施設として記されているのが、葉山子供園であり、9名の引揚げ孤児を金沢郷から引き取ったことが記録されている。同園については、現在施設が存在せず、記念誌なども残されていないため、詳しい情報が把握できないが、2011（平成23）年6月15日付『神奈川新聞』の記事「愛情注がれ立派に…逗子『葉

山子供園』の戦災孤児、半世紀ぶり涙の同窓会」では、同園の設立経緯について以下のように記されている。

葉山子供園は、園長の天野操さん（85）が、女学校を卒業した20歳のときに運営を始めた。戦地から引き揚げてきた孤児や、横浜大空襲で親を失い伊勢佐木町などで路上生活をしていた孤児らが次々と預けられ、共同生活を送った。天野さんは“お姉さん”と慕われ、関わった子どもは100人以上。「行き場のない子どものために、何かしないといけないと思っていた」と当時を振り返る。〔中略〕同園は1956年に閉園。天野さんは米国で暮らすようになったため、教え子たちと会うことが難しくなっていた。

本記事からは、葉山子供園は園長の天野操によって設立された施設で、1956（昭和31）年まで存在していたことが把握できる。『所誌』によれば、1946（昭和21）年2月に県の担当者へ天野が施設の建設を申し入れ、葉山の寺院で保護施設を開設した後、すぐに逗子の寺院に移ったことが記録されている。同書では1951（昭和26）年の段階で、同園が三浦郡逗子町桜山2194に所在し、経営主体は個人（天野操）、収容定員は20名で実収容人数は23名（内3名は県外の児童）であることが記されている。引揚孤児や戦争孤児を保護した多くの団体が、財団法人などある程度の組織力を有していたにも関わらず、困難な経営を迫られる中、若い女性が個人の力で保護活動を行っていたことは、注目に値する事実であると考ええる。今後、天野氏や同園の卒園生にコンタクトをとり、その活動を明らかにしていきたい。

(5) 益富鷺子による引揚孤児の保護

浦賀港に上陸した引揚孤児は、神奈川県外の施設でも保護されていた。『局史』の【表2】には、県内の施設に保護された100名の孤児のほか、備考として「本表の外十四名は援護所より直接縁故者又は篤志家に引渡し又は依託した」と記されており、篤志家が保護を行った事例があったことが把握できる。この記録の14名に該当するかどうかは不明だが、県外の人物が保護を行った事例として確認できるのが、益富鷺子の保護活動である。

益富の活動については、フリーランスのライター・編集者である大橋由香子氏が記した『満心愛の人 益富鷺子と古謝トヨ子ーフィリピン引き揚げ孤児と育ての親ー』（インパクト出版会、2013年）に詳細が記述されており、その概要を把握することが出来る。本書によれば、益富はキリスト者であり、鉄道基督教青年会の創設者である益富政助の長女として1910（明治43）年に東京都新宿区に生まれ、東京女子大学に進学し、卒業後東京都足立区本木町にある児童保護施設、愛恵学園に就職する。同園は1930（昭和5）年に米国のメソジスト教会宣教師ミルドレッド・アン・ペインが設立したセツルメントで、益富は貧民街の未就学児童保護及び児童の教化事業などに取り組んでいたが、対米戦争開戦により、ペインは抑留された後、米国に送還され、施設は閉鎖に追い込まれる。この後、キリスト教社会運動家の賀川豊彦の秘書となり、戦時中から厚生省分室の戦災孤児救援事業に携わっていた。敗戦後、益富は賀川から、キリスト教社会事業団体、愛隣団の養護部の開設主事に任命され、浦賀港の引揚孤児の保護に携わることになる。賀川がフィリピンの引揚孤児の存在を知ったのは、日本YMCA実行委員の斎藤惣一から、引揚船ジョージ・ノリス号に孤児が乗船しており、引取先がないことを知らされたためであり、益富が浦賀に派遣され

ることになった⁵²。当時の様子を益富は以下のように記している。

たまたま私は終戦の年の暮れ、ふとしたことから南方比島方面からの引揚げの孤児達にめぐり会い、その衰えはてた惨めな姿を目の前にした時、今更らのように戦争のいまわしさをしみじみ思わせられ、又このいたいけな子供達を如何にもして助け出さねばならない義務と責任を痛感しました。

〔中略〕

終戦直後のこととて、いちじるしい食糧難、住居難、衣料難で、何も彼もが不自由な時代でした。しかも引き取った孤児達は誰も彼もが病気でした。ある者は、マラリヤ熱、ある者は回帰熱、ある者はアミーバ赤痢、等々、その上誰もが極度の栄養失調で骨と皮ばかり、しかも全身は疥癬にうみだれているなど、その病苦から彼等を扶け起すことはまことに至難の業、かてて加えて、精神的な苦悩のためか、笑うことも、話すことさえも忘れた悲しい子供達でした。私は彼等の食べ物を求めてかけめぐりました。衣類を求めてたづね歩きました。薬をさがしに走り廻りました。彼等の生活を支える苦労は並々ではありませんでした⁵³。

この記録からは、春光園と同様に、極めて厳しい状況に置かれた孤児達の状況が記されており、このような孤児達を目の当たりにした益富が彼等の保護に尽力していたことがわかる。大橋氏の著書には、益富に保護されたフィリピンの引揚げ孤児、古謝トヨ子氏の聞き取り調査記録が記載されており、保護された直後の状況が詳

しく把握できる。古謝氏はフィリピンのダリアオン収容所で父を亡くした後、引揚船の中で母を亡くして孤児となり、4人の兄弟、姉妹と共に、1945（昭和20）年11月に浦賀港に上陸し、鴨居収容所で一時保護された後、益富に保護された。この時、ミンダナオ島から古謝氏と兄弟を含め8人、ルソン島のマニラから4人、合計12人の孤児が保護されたという。

当初、孤児達は世田谷区三宿の旧陸軍兵舎で生活をしたが、好ましい環境でなかったために、益富のもとの職場である愛恵学園に移されることになった。同園は戦後、元のメスジスト教会の運営に戻り、ペインも1946（昭和21）年に帰還し、益富の活動を支援しようと試みたが、米国のミッションボードの理解が得られず、孤児を保護することが出来なくなったため、台東区の愛隣団の施設に移ることになる。

愛隣団内部においても、孤児の受入には異論があった。もともと、愛隣団は地域の罹災者救護や保育などの地域的な仕事を任務としていたセトルメントであり、引揚げ孤児の保護は組織の趣旨に反するものであるほか、資金的にも困難が伴ったが、益富の熱意によってセトルメントの機能のなかに孤児収容が付け加えられたことが大橋氏の著書に記されており、益富の個人的情熱が引揚げ孤児の保護に大きく関わっていたことがわかる。愛隣団は現在でも社会福祉法人愛隣団として東京都台東区で活動を継続しているため、関係資料の調査を今後おこない、より詳細な引揚げ孤児保護の実態の解明に取り組みたいと考える。

52 この間のいきさつは、三吉保編『愛恵学園物語－その五十年の足跡－』（愛恵学園、1986年）127～129頁の記述による。

53 益富鶯子「青少年の福祉」『看護 = Journal of the Japanese Nursing Association』（日本看護協会機関誌、第15巻第11号、1963年11月）19頁。

● おわりに

戦後、横浜の街に多く存在した戦争孤児・浮浪児たちの保護は、彼等を保護するために設立された多数の民間児童養護施設が大きな役割を果たしていた。そのあり方は、唐池学園のように、個人の尽力によって設立されたものや、日本厚生団のように、多様な戦争被害者の救済活動の中から生まれたものなど、様々であったことがわかる。脱走を繰り返す孤児達の保護は、困難を伴うものであり、各施設では創意工夫をして孤児達が浮浪生活に戻らぬよう、配慮が為されていたことが資料から見えてきた。また、引揚孤児は引き揚げ途中の環境が劣悪であったことから、多くの孤児が重度の栄養失調の状態にあり、死亡する者も多く存在するなど、国内の戦争孤児以上に切迫した状態に置かれていた。これらの孤児の保護には、金沢郷の幼年保護会や横須賀隣人会春光園など、民間の社会事

業団体が大きな役割を果たしており、天野操や益岡鷺子など、個人の尽力によるところも大きかった。このような活動がなされなければ、より多くの孤児が死亡していたことが想像できる。

今年度の調査では、横浜市内に存在する施設を主な調査対象としたが、横浜の戦争孤児保護には、神奈川県内の各施設が役割を果たしていたことが明らかになった。今後の研究課題は、より多くの施設を対象として残された資料を発掘することに加え、施設で保護された経験を持つ方々から聞き取り調査をおこない、その成果から戦争孤児保護の実態を解明することである。継続した調査を行い、順次その成果を本紀要などに発表していきたいと考える。

小稿の執筆にあたり、(福) 福光会 子どもの園園長、和田直熙氏と(福) みどり福祉会 常務理事の戸田堯子氏に多大なご協力を賜りました。末尾ながら厚くお礼申し上げます。